

〔倭訓栞中編三〕をのこ 男子也、めのこにむかへていふ詞也、神代紀に男をよみ、又をのこ、とも見ゆ。

〔古事記傳 二十三〕男は袁ヲト等古コと訓べし、記中袁ヲト等古コには、壯夫と書て、少壯なるを云、男字は、たゞ袁と云にあたれども、又老少をいはずなべても、袁等古、袁美那と云ることあり、

〔松の落葉〕男女

男ををといひ、女をめといふ事は、いにしへより今にかはらず、男女とつゞけては、今はをとこをんなとのみいへど、いにしへはをのこめのことといひし事にて、日本書紀の皇極天皇卷に、男女のもじを玄かよめりき、神代紀に少男少女を、をとこをとめとよむべきよし、云るされて、をとこはわかきをのこの事にて、をとめにのみたぐへいふべきことわりなるに、萬葉集廿の卷に、秋野爾波、伊麻己曾由可米、母能乃布能乎等、古乎美奈能、波奈爾保比見爾、といふ歌ありて、ふるくよりをんなにもたぐへいへり、これはことわりには、たがひたれど、奈良の京のころは、かくもいへりしなり、古今集の序にも、をとこをんなの中をもやはらげとありて、中むかしには、をとこをんなといへり、されどしかつゞけず、はなちていふときは、物語ぶみなどにも、をのこみこをんなみこなどいひて、をとこといはず、源氏物語権本卷にも、子の道のやみをおもひやるにも、をのこはいとしも、おやの心を見ださずやありけん、をんなはかぎりありて云々といへり、かゝればうちまかせて、男ををとこといへるには、あらざりき、さてをのこめのこといふは、をめにこといふ詞をそへたるにて、うやまふ心こそあれ、いやしめていへるこゝろは、さらになきを、中むかしよりは、よき人のうへには、いはず、すこし、まもぎまの人にいふ事となれり、宇津保物語の吹上卷に、舟どもにめのこどもおりたちて、そめくさあらへりといひ、又これはうちものゝところ、ごだち五十人ばかり、めのこども三十人ばかりといへるを見るべし、ごだちはよき女房の事、めのこどもとい